

## KSMS 国際学会 参加報告

第 16 期 関口 治花（インゼミチーム）  
平間 遥絵（マケ論チーム）

### ◆KSMS 国際学会とは…？

KSMS 国際学会は、正式名称を“Korean Scholars of Marketing Science International Conference”といい、日本商業学会も加盟する GAMMA という国際学会連合に加盟する KSMS という学会組織が開催する学会の 1 つです。2018 年は、“Searching for the New Roles of Marketing in Challenging Business World”をテーマとして、韓国の延世大学および西江大学で開催されました。本学会には、各国の研究者たちが発表を行う Session と、延世大学および慶應義塾大学の学生が発表を行う Session の 2 つが設けられており、小野ゼミは例年、後者の Session に 1 チームのみが出場しています。本年度は、例年とは異なり、前者の Session ではインゼミチーム、後者の Session ではマケ論チーム、計 2 チームが、著名な研究者の皆様の前で、発表を行いました。同期全員で KSMS 国際学会に出場したことは、私たち 16 期生にとって、非常に良い思い出となりました。



韓国の繁華街にて同期で記念撮影

### ◆発表までの研究活動 —— インゼミチーム ——

小野ゼミは、2014 年から KSMS 国際学会の学生のみが発表を行う Session に参加していますが、この Session には、各団体 1 チームしか発表することができないというルールがあります。しかし、私たち 16 期は、インゼミチームとマケ論チームの両チームが「KSMS 国際学会に参加したい」という強い意志を持ちました。そこで、インゼミチームは、例年参加している学生のみが発表を行う Session ではなく、各国の研究者たちが発表を行う Session に参加することを決めました。この Session に参加するためには、5 ページに及ぶ英文のアブストラクトを投稿し、査読を経て、発表権を参加しなくてはなりません。例年と比較して困難な道を選択したため、壁にぶち当たるのでは…？と懸念されたインゼミチームでしたが、その道のりは、思いの外、順風満帆でした。夏合宿からアブストラクトの作成に取り掛かり、小野先生のご指導のもと、英語の得意なメンバーを中心に、チーム全員で協力をして、着々とアブストラクトを書き上げて行

きました。結果、期限内に余裕を持って、アブストラクトを投稿することができました。投稿した後、受領通知を受け取るまでは、「発表権を獲得できるだろうか」という不安な気持ちも芽生えましたが、無事発表することを許可する受領通知を受け取った際は、嬉しい気持ちでいっぱいになったことを、今でも鮮明に覚えています。困難な道を選択したからこそ、感じる達成感はひとしおでした。(関口)



韓国にて記念写真（著者は右から2番目）

#### ◆発表までの研究活動 —— マケ論チーム ——

「関マケで優勝しよう。」この言葉で始まった第16期日論チームの論文活動は、始まって早々難航を極めていました。決まらない論文テーマ、我が強いメンバー、チーム分裂の危機などなど、問題はどこからともなく浮上し、そのたびに私たちは、数えきれないほどの喧嘩をしました。暗雲が立ち込めていた私たちの論文活動でしたが、前期最後の本ゼミにて、先輩方の論文テーマを参考にしよう小野晃典先生にアドバイスを頂き、ようやく論文テーマが決まりました。「広告集積における消費者の反応 —— 視覚的複雑性に着目して ——」という論文タイトルのもと、なかなか本文を執筆できない状況や上手くいかない実験に悶々としながらも、10月中に自分たちの論文を書き終え、その論文を海外学会で発表するという目標を据え、巻き返しを図りました。毎日のように朝から夜遅くまで、実験と論文執筆を進め、それに平行して海外学会での発表に向けた資料作成を行いました。その結果、ようやく韓国での発表準備を整えることができました。(平間)



3ゼミ合同中間発表後の納会にて記念写真（著者は左端）

#### ◆韓国での学会発表 —— インゼミチーム ——

私たちインゼミチームは、11月9日、小野先生、奥様、15期の合場さんと共に全員で韓国へ出発しました。韓国が好きな私は、小野ゼミに入会する以前から、韓国語の本や教科書を買ったり、ドラマを見て発音を身に着けたりと、独学で韓国語の勉強をしていました。旅行で韓国へ行ったことが一度あったものの、このような素晴らしい形で韓国行く日が訪れるとは、小野ゼミに入る以前は夢にも思いませんでした。

初日の朝、機内にて、発表を翌々日に控えたマケ論チームの同期が、離陸する前から原稿を片手に発表の練習をしている姿を、私はふと目にしました。私は今でも、彼の姿を鮮明に覚えています。どんな時でも全力でやる気に満ち溢れている同期を持っていることを、強く実感した瞬間でした。

韓国に到着し、昼食を食べ、休憩した後、私たち同期と合場さんとたくさんの屋台とお店が立ち並ぶ賑

わいの街、明洞に行き、買いたいもの、したいこと、それぞれ思い思いの時間を満喫しました。思い切り楽しんでいたものの、私たちインゼミチームは発表を翌日に控えていることを忘れてはいませんでした。ホテルに戻った後、翌日に控えた学会発表に向けて、チームで集まって部屋で夜中まで練習しました。チーム全員が1つの部屋に集まり、チームワークを際立たせるにはどうしたらよいか、プレゼンが実際の聴衆にとって分かりやすく聞き取りやすい英文になっているかなど、最後の最後まで気を抜かず一丸となって練習をしました。このメンバーで、この場所で、学会発表の練習ができるのは、これが最初で最後ということを噛みしめて、全員で同じ時間を過ごし、最初の1日が終わりました。

翌日、私たちは発表ぎりぎりまで通し練習を行い、非常に緊張感を持ったまま本番を迎えました。全員が、自分の研究成果に自信を持ち、堂々とプレゼンすることができ、大きなミスもなく発表を終えることができました。中でも特に嬉しかったことは、仲間が発表をしている最中に、ふと聴いてくださっている学者の方々の顔を伺うと、楽しそうに頷きながら聞いてくださっていたことです。私たちの熱意が伝わっていた証拠であると実感した瞬間でもありました。「インゼミチームで、韓国国際学会に出られたこと」は、私にとって本当に光栄で幸せなことでした。小野ゼミに入っていなかったら、このような経験は人生ですることがなかったなと思うと、どんなに素晴らしい環境に身を置くことができているのだろうと、数えきれない感謝の言葉が出てきました。

最後になりましたが、どんな時でも熱心にご指導してくださった小野先生、的確なアドバイスを常にくださった大学院生のみなさま、グループ学習室に何度も足を運び寄り添ってくださった15期の先輩方、そして共に苦楽を乗り越えてきた最高の同期に、感謝申し上げます。心から、ありがとうございました。(関口)



小野先生と発表後の記念撮影（著者は右端）

#### ◆韓国での学会発表 —— マケ論チーム ——

今回の学会発表は、我らが小野晃典先生、15期の合場将貴さん、そして、私たち日論班も含めた16期全員という珍しい組み合わせのメンバーで参加させていただきました。16期の英論班の発表が土曜日、私たち日論班の発表が日曜日に控えていたため、私たちは金曜日の朝に現地入りしました。そして、発表を控えていることを一旦忘れて、思い切り羽を伸ばしました。流石は美容の国、韓国。行く先どこも、化粧品店ばかりで、著者を含めた女性陣は化粧品を買い漁りました。一方、男性陣は、化粧品店には目もくれず、

飲食店で目の前にこれでもかと言うほど提供される韓国料理を堪能しました。その日は日が暮れるまでソウルの街を楽しみました。しかしながら、私たちは観光ではなく、海外発表を目的として韓国まで来たことを忘れてはいけません。私たちは、夜には英論班と日論班に分かれ、それぞれ誰かの部屋に集まり、発表資料の修正や台本の暗記に徹しました。私たち日論班は、「発表までもうあと1日あるし、大丈夫だよ。」とお互いに声をかけ合い、深夜2時頃、眠りにつきました。しかしながら、そうお互いを励まし合っていたものの、私たちはその時点で、未だに発表資料と台本が完成していませんでした。英論班の堂々した発表を見届けた後、小野先生のお力添えも賜りながら、発表資料と台本の修正作業に取り組み、その晩、ようやく修正作業が終わりました。この時点で、明朝の発表までに残された時間は、半日ほどでした。そこで私たちは、小野ゼミらしく、夜を徹して発表練習に打ち込むことに決めました。眠くならないよう、なるべくベッドから身を遠ざけるために、24時間営業しているカフェを探し、一晩中発表練習を行いました(カフェが満席になるほどのたくさんの韓国人学生が、夜のカフェで熱心に勉強に励んでいる姿に驚きました)。途中、英語をなかなか暗記することができずに弱音を吐くチームメンバーもいましたが、喧嘩を経て仲を深めた私たちは、互いを鼓舞し合い、後悔をしない発表にすることを誓い合いながら、発表準備に勤めました。

万全の準備で臨んだ発表本番ではありましたが、緊張をしたまま、私たちの出番を迎えました。発表の出来栄は満点と言えるものではなかった気がしますが、私たちの発表が終わった途端、広告研究において著名な研究者の方が突然席を立ち、「広告の研究は難しいのに、学部生でここまで取り組めたことを称賛したい。」と声をかけてくださいました。その後も、私たちの研究の改善点について研究者の方々が議論を交わしたり、アドバイスを下さったりしました。発表後に小野先生から頂いた、「大成功でしたね!」というお言葉は、その先の私たちの論文活動に自信を与え、後押ししてくださいました。

最後に、時間を問わず、どんな時も指導して下さった小野先生、貴重なアドバイスをくださった大学院生のみなさま、いつも近くで見守って下さった第15期生



小野先生と発表後の記念撮影 (著者は右端)

の先輩方、そして共に論文活動に取り組みつつ励ましあった第16期生の同期に、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。(平間)